

## 喪失とモラトリウム

### ―村上春樹「イエスタデイ」「独立器官」「シエラザード」―

東 海 義 仁

#### 1、はじめに

村上春樹「イエスタデイ」「独立器官」「シエラザード」は、短編集『女のいない男たち』に収録されている作品である。コンセプトチュアルに並べられた作品群には共通のモチーフが存在する一方、そのモチーフの描き方には差が生じる。本稿では、同じ短編集に収録されている3作品で描かれている男性の差に着目することで、同じモチーフがどのような違いをもつて描かれているのか明らかにする。

#### 2、自己決定とモラトリウム―「イエスタデイ」―

東京生まれ東京育ちの木樽は、熱狂的な阪神タイガースのファンであることから後天的に関西弁を学び、「僕」に「ほぼ完璧な関西弁」と称されるほどの習得状態である。「関西弁を身につけるとおんなじくらい、受験勉強にも熱心に身を入れてたら、二浪なんかしてへんのやろけどな」と木樽自身が言うように、関西弁を習得するための努力と、受験勉強への努力には明らかなモチベーションの差がある。これほどの差が生じるのは何故だろうか。

ここでは、モチベーションに差がある要因として、先天性と後天性（先天的と後天的）に注目する。自己決定理論において、その行動への興味・関心によって動機づけられている内発的動機づけの状態は、外部からの働きかけによって動機づけられている外発的動機づけの状態と比較して自己決定の度合いは高い<sup>1</sup>とされる。木樽のモチベーションに差が生じる要因を自己決定の度合いから検討すると、関西弁を習得しようという決意は自己決定の度合いが高いことに対し、受験勉強をしようという決意は自己決定の度合いが低いことがわかる。関西弁を習得することは、熱狂的な阪神タイガースのファンである木樽が同じコミュニティの仲間から認められるために重要度が高く、木樽にとって必須事項だった。しかし、少なくとも二浪が決定している時点の木樽にとって、受験勉強はそこまで自己決定の度合いが高い事項にはなっていない。栗谷えりかが「あの人の頭にはなぜか早稲田しかないわけ。早稲田に入るしかないって思い込んでる」というように、木樽にとって早稲田大学への合格

<sup>1</sup> 安藤史高「自律的な学びを旨指して」(『コンピテンス 個人の発達とよりよい社会形成のために』ナカニシヤ出版二〇一二年・三) 一一一―一三頁。

は先天的なものとなっているからである。早稲田大学へ進学することが木樽にとって自己決定の度合いが低いものであるなら、そのために受験勉強をするモチベーションが上がらないことに繋がるだろう。当事者が先天的であると感じるものは自己決定の度合いが低くなりやすく、後天的であると感じるものは自己決定の度合いが高くなりやすい。

このように、モチベーションの差は自己決定の度合いの高低差と密接なものであるが、これは木樽と栗谷えりかの関係にも同じく当てはまるものである。小学校のときからつきあっている幼馴染で、地元の小学校から高校まで人生のほとんどを一緒に過ごしてきた関係は、木樽にその後の心地よい人生を想起させる。それはあまりに容易に想起できるものであるため、木樽には先天的に与えられた人生のように思えたのではないだろうか。また、木樽だけでなく栗谷えりかも似たような感情を抱く。栗谷えりかは木樽のことが心から好きだと言いがらも、「でもそれと同時に、なんていうのかな、私の中にはもっと違う何かを見つけてみたい、もっと多くのものと触れあってみたいという、強い思いもある」ことを認める。幼馴染である二人にとって、お互いが結ばれることは先天的に与えられた人生のように感じられるもので、そうではない後天的な可能性には自己決定の度合いを高く感じてしまう。幼馴染であることは当事者から自己決定の実感を削ぐ要因となり、木樽の自己を分裂させ、栗谷えりかが他の男と肉體関係を持つことに加担する。

また、木樽は「それでそのまま二人仲良く大学にすんなり進学できたら、人生何の破綻もなし、万事めでたしめでたしやつ

たんやけど、おれは大学受験にみごと失敗して、ごらんのとおりや」と回想するが、木樽が大学受験に失敗したことは、栗谷えりかとの関係がうまくいかなかった契機ではない。木樽は早稲田大学へ、栗谷えりかは上智大学へ進学していれば、小学校から高校まで同じだった二人にとって初めて別々の場所で生活することになる。そうなれば、これまでと全く同じ関係を維持することは難しく、少なからず関係性は変化していただろう。木樽は大学受験を迫られた際に栗谷えりかと同じ大学へ進学することを避け、漠然と違う大学へ進学しようと思いついたのではないだろうか。そうであるならば、これまでの関係を維持するために同じ大学へ進学することが先天的なものであり、木樽が早稲田大学へ進学することは後天的なものであるともいえることになる。本稿において、先天性や後天性といった概念は自己決定の度合いを左右する要因の一つに過ぎない。なにが先天的なものでありなにが後天的なものであるかは、当事者がそれを先天的なものと感じるか後天的なものと感じるかに委ねられており、早稲田大学へ進学することが先天的か後天的かは木樽の感じ方によって変化する。仮に高校三年生の時点では早稲田大学への進学は後天的なもので自己決定の度合いが高かったとしても、二浪時の木樽にとっては既に先天的なものになっているかもしれない。栗谷えりかによれば、木樽は「早稲田に入るしかないって思い込んで」ため、早稲田大学への進学が自己決定の度合いの高い決意であるとは考えにくい。その選択は後天的なものであったとしても、自己決定の度合いが高くないものであったが故に、受験勉強へのモチベーションに繋

がらなかったのではないか。

また、物語は自己決定の度合いが高い決意を肯定するように進行している。先天的なものを捨てて後天的なものを追い求めることは、安定を捨てて変化の中に身を置くことを意味する。栗谷えりかは「若いときにはそういう淋しく厳しい時期を経験するのも、ある程度必要なんじゃないかしら？つまり人が成長する過程として」と述べ、それを樹木の年輪に当てはめるように、うまくいかない期間は人生を豊かにするために必要なものであると位置づける。木樽が関西弁を習得できていることだけでなく、鮎職人となっていることも、自己決定したことが成就されている例となるだろう。

物語には、十六年前の場面とそれから十六年後に「僕」と栗谷えりかが再会している場面があり、「僕」と栗谷えりかはそれらの場面で氷でできた月の夢について会話する。栗谷えりかがその夢を見ていたのは大学生の頃であり、十六年後に「僕」と再会した時はその夢を見なくなっているため、十六年前と十六年後では変化がみられる。氷でできた月の夢はいったい何を表しているのだろうか。

栗谷えりかは「私とアキくん二人だけでそういう航海を続けていられたら、どんなに素敵だろうと思う。私たちは毎晩二人で寄り添って、丸い窓から氷でできた月を見るの」と、その夢の中のように木樽と時間を共にすることを望む。そして、氷でできた月がある日突然出てこなくなることに恐怖を感じる。十六年後の「僕」は、十六年前に同じように氷でできた月の夢を見ていた気がすると回想し、この頃の自分は「どこまでもひ

とりばつちで孤独」で「日々何をすればいいのかもわからず、思い描ける将来のビジョンもなかった」と振り返る。「僕」も栗谷えりかも、自分のあり方や将来について模索し、迷走している時期に似たような夢を見ており（正確には「僕」は見えていたかどうかからない）、十六年後には見なくなっていることから、氷でできた月の夢は青年期のモラトリウム期間に現れるものであると考えられる。高村和代は「青年期は人生におけるいろいろな意思決定をするために試行錯誤を行い、社会に出る成人前期までの間に、十分に考え悩み、自分自身を見つめるための時期である」<sup>2</sup>としており、試行錯誤したり自分自身を見つめたりしている「僕」や栗谷えりかを重ねることができ。モラトリウム期間は人生の特定の期間を指すものであり、いつその期間が終わりを迎えるかは不確定である点で脆いものである。氷は時間の経過と共に溶けていくものであり、それはモラトリウム期間が少しずつ消費されていくメタファーとなり得る。

このように「イエスタデイ」では、自己決定の度合いによるモチベーションの差異だけでなく、モラトリウム期間に行った試行錯誤の上の決意が将来的に肯定される様子が描かれている。では、試行錯誤を伴う経験をモラトリウム期間にする場合とそうではない場合にはどのような違いがあるだろうか。

2 高村和代「青年期の悩みとその意義」『コンピテンス 個人の発達とよい社会形成のために』ナカニシヤ出版二〇一二・三 四〇～四一頁。

### 3、因果関係を無視する語り——「独立器官」——

「僕」は「まったく純粹な客觀的事實だけでこのポトレイトが出来上がっているわけではない」と断りを入れた上で渡会医師の優秀さを語り、彼がどのように死を迎えたか語る。そのようにして語られる渡会医師の優秀さや女性経験の豊富さは、「独立器官」がいかに強力であるかを際立たせる。言い換えれば、優秀であることや女性経験が豊富であることは、恋の前には無力であるともいえるかもしれない。物語の後半で、渡会医師は自身が築き上げてきたものを失った後に死に至る。渡会医師は、相手を好きになり過ぎないよう努力するような恋愛を「若いうちに経験しておけばよかった」「そうすれば免疫抗体みたいなものも作られていたはず」と口にし、岩宮恵子は「十四歳のときに深く傷ついたことがあったとしたら、渡会医師の未来は違ったものになったかもしれない。彼は五十二歳になるまで、まだ心理的には十四歳に達していなかった」<sup>3</sup>と主張する。「イエスタデイ」において肯定されていた、モラトリウム期間での試行錯誤を伴う経験が渡会医師にはない。そこで、モラトリウム期間と成人期とで同じ経験をした際にどのような違いがあるのか検討してみたい。モラトリウム期間には個人差があるため、本稿では岩宮恵子の主張をもとに十四歳の時期を想定する。特殊な例を除いて、十四歳の子どもは家族や学校という社

3 岩宮恵子「十四歳という人生の独立器官」『文學界』二〇一四・六

会に属しており、それはある程度の強制力を持つものである。成人期においても家族や会社という社会に属するのが一般的であるが、十四歳の子どもが守られる存在であるのに対し、成人期では自らが自らを守ることが求められるだろう。例えば、未成年が罪を犯したとしてもその刑罰は軽いものとなり、更生するための支援も比較的充実している。その点で、失敗から立ち直りやすい環境が整えられているといえそうである。一方、「僕」が「免疫抗体なんてできないまま、たちの悪い潜在的病根を体内に抱え込むようになった人を僕は何人か知っている」と思うように、個人の受けるダメージが軽減されるか否かは定かでない。また、同じ経験による苦悩の強弱は、十四歳の時期と成人期とで変わるものでもないだろう。モラトリウム期間と成人期とは、個人を取り巻く環境にこそ違いが生じるが、その経験から与えられる影響力の強弱にたしかな差はないのではない。また、「イエスタデイ」のように、モラトリウム期間での試行錯誤を伴う経験が肯定される保証はない。

結果的に渡会医師は死に至るが、その前段階として、「彼女の心と私の心が何かでしっかりと繋げられてしまっているような気がする」と、恋に落ちた女性への精神的依存の症状が「僕」に語られる。それは、食事ができないという身体的な症状や、湧き出る怒りをコントロールできないという精神的な症状として現れており、渡会医師が危機的状況にあることは一目瞭然である。同時に、ナチの強制収容所についての本を読んだことで「自分とはいったいなものなのだろう」という疑念に取り憑かれた状態となるが、これも恋に落ちたことによる精神的依存

が原因である。精神的依存の状態では、自分と相手との繋がりが、それが最も重要になるため、それ以外の他者や社会との繋がりが軽薄なものとなる。自己とは、恋に落ちた相手を含む多くの他者や社会との繋がりの中で形成されるものである以上、ナチの強制収容所のような極めて異質な状態に身を置いた状態で自己を確立させることは難しい。渡会医師は恋に落ちた女性に精神的依存をしまつていくために、ナチの強制収容所に送られた内科医に自身を重ねるが、その時点で極めて危険な精神状態であることは明らかだろう。

一方、「僕」は渡会医師からそれらのことを聞いていながらも、渡会医師の死について歪んだ解釈をする。渡会医師が死を迎えた理由について明確な叙述はなく、「僕」は秘書の後藤から聞いたことをもとに、拒食による心不全を恋煩いによるものであると推測する。後藤は「本当に文字通り、食べ物が喉を通らなくなった」と推測を告げるが、それが恋煩いからくるものであることに同意する。拒食状態に陥ってからの渡会医師の言葉は限られたもので、その死を読み解くために、ある程度の推測を必要とするのは仕方ないことである。しかし、「僕」は渡会医師から直接「食べ物もろくに喉を通りません」と言われ、後藤から「食べ物か喉を通らなくなった」という言い方で推測を告げられているにもかかわらず、「もしそうしようと思えば、彼はこれまでどおりの技巧的な人生を継続し、まっとうすることだってできたのだ」と語る。渡会医師や後藤の言い方には、自分ではどうすることもできないというニュアンスがあるのに対し、「僕」の言い方には、渡会医師が崇高な志と超人的な理性

によって自ら死を迎え入れたというニュアンスがある。事実が語られていない以上、渡会医師の心情を断定することは難しいが、「僕」が渡会医師を祭り上げるように語っていることは明白である。渡会医師がどういう人物であったかを形容することは事実よりも重要であり、事実「僕」が描く渡会医師像を際立たせるために書き換えられる。

事実とその理由の因果関係が無視される様は〈独立器官〉という言葉にもみられる。〈独立器官〉は、女性が嘘をつく際に用いられる器官であると同時に、男性が恋に落ちる際に用いられる器官でもある。「すべての女性には、嘘をつくための特別な独立器官のようなものが生まれつき具わっている」という渡会医師と、それに賛同する「僕」は、嘘をつく際に〈独立器官〉を用いることは女性だけの特徴として挙げる。男女間で〈独立器官〉の機能に差があり、嘘をつく女性には加害性、恋に落ちる男性には被害性がそれぞれ付与される。言うまでもなく、恋愛において、加害と被害の関係は男女どちらとも当てはまるもので、状況次第でどちらもが加害者・被害者になり得る。しかし、〈独立器官〉という言葉は、女性⇨加害者、男性⇨被害者という構図を強調する。また、良心を痛めずに嘘をつくこととその理由、本人の意思ではどうすることもできないほど深く恋に落ちることとその理由がそれぞれ掘り下げられない。本来、嘘をついたり恋に落ちたりすることにはなんらかの因果関係があり、だからこそ状況次第で加害や被害の立場が定まる。因果関係が無視されることで、男女間で〈独立器官〉の機能に差が生じるだけでなく、「僕」がそうであると信じる渡会医師像が



語られるのである。

「独立器官」では、深く恋に落ちてしまったことで他者や社会との繋がりが軽薄になり、結果的に女性を喪失する男性が描かれていたが、もちろんこの逆もあり得るだろう。

#### 4、コミュニケーションの双方向性——「シエエラザード」——

村上春樹はまえがきで、短編集『女のいない男たち』のモチーフが「いろんな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち」であると述べる。それを受け、向山守は「『シエエラザード』の羽原は、作中唯一の男性登場人物なので、彼が『女のいない男たち』であることは間違いないのだが、おそらく、ほとんどの読者がそう考えるのに抵抗感を覚えるだろう。というのも、羽原がシエエラザードのことを好きなのか、本当に愛しているのか、あるいは、この二人の関係を『恋愛関係』と読んでいいのか躊躇してしまうからである」<sup>4</sup>と、やや疑問を残した状態で羽原が「女のいない男たち」に該当すると指摘する。本文中に「あるいはまた、彼はすべての自由を取り上げられ、その結果シエエラザードばかりか、あらゆる女性から遠ざけられてしまうことになるかもしれない」や「そのことが、またそれをいつか失わなくてはならないであろうことが、彼をおそらくは他の何よりも、哀しい気持ちにさせた」と、

再びを意味する「また」という副詞が用いられていることから、羽原は「いろんな事情で女性に去られてしまった男たち」であり「去られようとしている男たち」であるといえるだろう。羽原は女性に去られてしまった経験を有しており、それはシエエラザードの喪失を恐れる要因となる。

三十五歳の専業主婦であるシエエラザードは、一度性行するたびに一つ興味深い話を語る。羽原は「シエエラザードとの性行為と、彼女の語る物語とが分かちがたく繋がり、一対になって」いることに戸惑い、「どちらかひとつだけを単体として抜き出すことはできない」いことに混乱する。性行為と物語とが分かちがたく繋がるのは何故だろうか。また、岩宮恵子は「物語の中に組み込まれていながら、それでいて現実を無効化してくれる特殊な時間」が「物語がこの世に必要とされる意味とほとんど同じ」であると指摘する<sup>5</sup>が、羽原を取り巻く現実はどうのようなものだろうか。

羽原は「ハウス」と呼ばれる隔離された空間で生活しており、テレビやインターネットも使用していないため世間からかけ離れた状況にある。羽原にとっての現実とは世間一般的現実とは異なるため、「現実を無効化してくれる特殊な時間」で無効化される現実も、世間一般的なものとは異なることになるだろう。羽原の現実とは非現実であると言い換えることが可能である。シエエラザードと過ごす時間は、羽原の現実を無効化すると同時に、羽原の非現実を無効化していることにもなり得る。しか

4 向山守『『女のいない男たち』について』（静岡福祉大学紀要）

二〇一六二二 九一頁。

5 前掲「十四歳という人生の独立器官」二四七頁。

も、羽原にとってシエエラザードは「ハウス」の外の世界と自身を結び付ける唯一の存在でもある。「独立器官」では、男性が深く恋に落ちた結果、他者や社会との繋がりが軽薄なものとなり、その後に女性を喪失する様が描かれていた。一方「シエエラザード」では、他者や社会との繋がりを厳しく制限されている男性が女性を喪失する様が描かれている。羽原はシエエラザードに恋をしているわけではないため、失恋ではなく「ハウス」での生活が終わることで女性を喪失するという点で違いがあるが、渡会医師の失恋も、羽原の「ハウス」での生活の終わりも、共に当事者である男性の立場からはどうすることもできない点では一致する。また、渡会医師の現実が無効化されることは彼を死に至らせることを助長するが、羽原の現実が無効化されることは彼を世間一般的な生活に近付ける。羽原は非現実的な状況にあるため、その現実の無効化はポジティブに作用するのである。

隔離された空間で生活するためには他者からの補助が必要で、羽原に必要なものを与えたり性欲を満たしたりしているのはシエエラザードである。そうして羽原を世話することは他の女性でも可能だが、羽原の興味を引く話を語ることができる点でシエエラザードは特異である。シエエラザードは「相手の心を惹きつける話術を心得ていた」「口調や、間の取り方や、話の進め方、すべてが完璧だった」と評されるが、どれだけ優れた話術を持ち合わせていたとしても、語る一方のみではその効果は十分に発揮されない。二者間での会話は、話し手と聞き手が相互にやり取りすることで成り立ち、これは一方が何かを語

る場合も同様である。聞き手が話し手へ適切な相槌を入れたり、適度な質問を投げかけたりすることは語りを円滑にするため、羽原は聞き手として役割を果たすことで、シエエラザードの巧みな語りを支えることに成功している。また、性行為においてもコミュニケーションの関係性は同じである。男女それぞれが自身の役割を果たすことで性行為は成り立ち、どちらか一方が尽くすような性行為においてもコミュニケーションは不可欠である。このように考えると、話を語ることと性行為をすることも共にコミュニケーションに双方向性がある点で等しいといえるのではないだろうか。「シエエラザードとの性行為と、彼女の語る物語とが分かちがたく繋がり、一対になって」いることは必然であり、それは羽原がコミュニケーションを成立させるだけの役割を果たしていることを意味する。

また、「イエスタデイ」において木樽と栗谷えりかが作品内で結ばれなかったように、安定した関係を破棄することは男女関係が終わりを迎える可能性を秘める。羽原はシエエラザードを喪失し、彼女が語る物語の流れが断ち切られることを恐れるが故に、「ただ君の話の続きが聞きたいだけ」とは答えない。シエエラザードがこれまで以上にプライベートな働きかけをしたことは、羽原に男女関係の終わりを想起させたのである。しかし、羽原がシエエラザードとの関係がいつかは終わることを認めるように、「ただ君の話の続きが聞きたいだけ」と答えないことでの延長は僅かな期間でしかない。

## 5、まとめ

「イエスタデイ」「独立器官」「シェエラザード」は、それぞれ「女のいない男たち」というモチーフを用いて描かれながらも、そのモチーフに該当する男性達には違いがある。「イエスタデイ」で肯定されていたモラトリウム期間での試行錯誤を伴う経験は、「独立器官」における渡会医師に欠如しているものとして描かれる。また、渡会医師は深く恋に落ちたことで精神的に依存した状態となる一方、制限された環境で生活する羽原には物語のはじめからシェエラザードとの関係しか残されていない。いずれにせよ、当事者である男性がどうすることもできないようになり、その後に女性を喪失する様子が描かれる。どのような経緯で男性がどうしようもできない状態に陥るか、また、どういった種類のどうしようもできない状態なのかに違いはあるが、それらは女性の喪失を招くきっかけとなっている。「女のいない男たち」というモチーフが喪失を含蓄している以上、それが訪れることから避けられないだろう。

付記 富山大学国語教育学会研究発表会(二〇一八・一一・二三)での発表「村上春樹「木野」論——暴力の原動力について——」は、『富山大学日本文学研究』(二〇一九・一)に「村上春樹「木野」にみられる暴力の在り方について」として掲載したため、本誌には別稿を用意した。

(富山大学大学院 人間発達科学研究科 平成30年度修了生)